

群馬の自然

40周年特集 印象に残る観察会

No.161

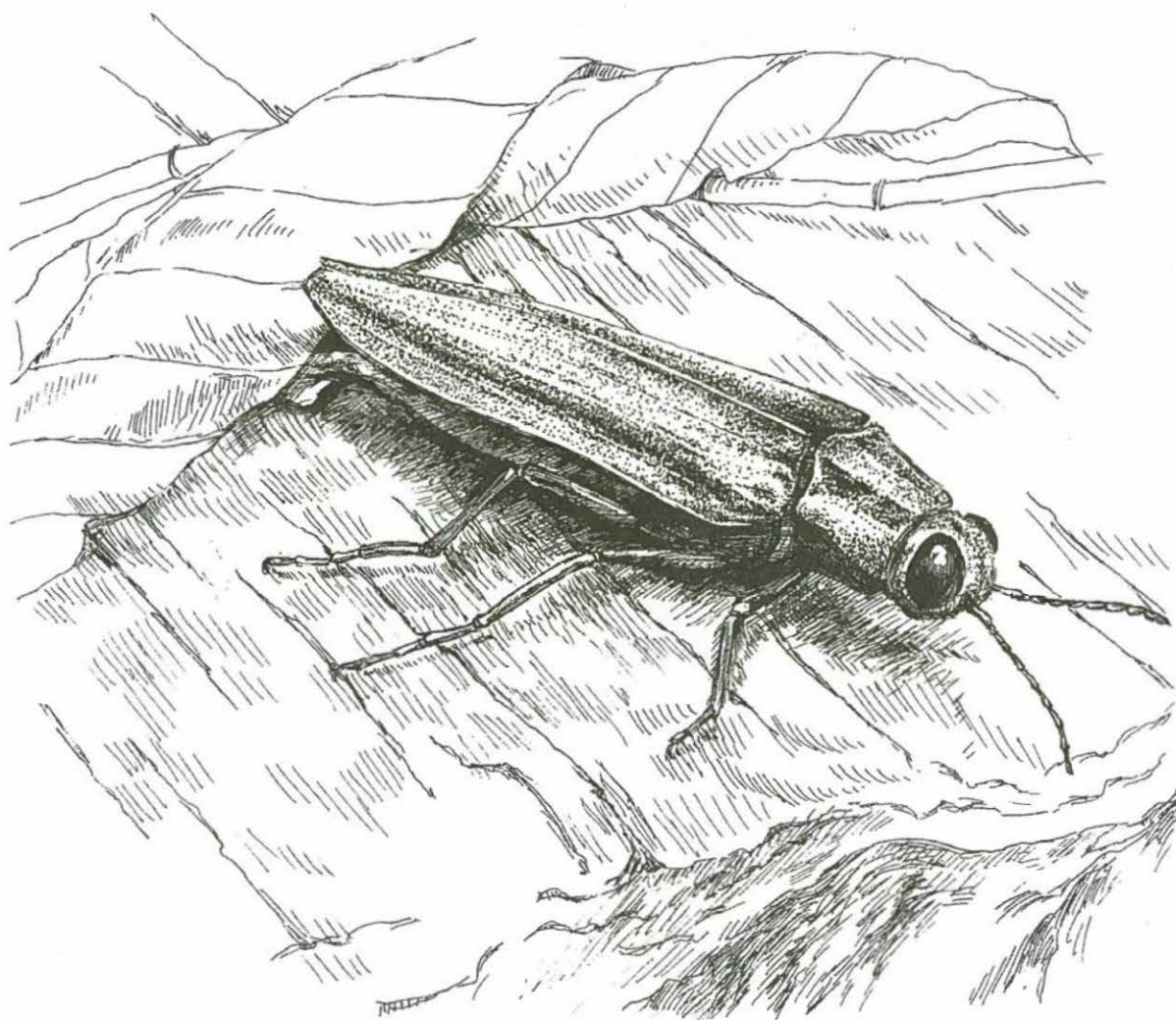
2011 夏

特定非営利活動法人 (NPO)

群馬県自然保護連盟

URL <http://www5.wind.ne.jp/shizen/>

e-mail sizen@dan.wind.ne.jp



産卵するタマムシ

一九七一年（昭和四六年）、尾瀬の自動車道路建設問題を機に発足した本連盟は今年で創立四〇周年を迎えます。活動の一つである自然観察会も数多く実施され今日まで来ています。夏号ではいろいろな立場で多数寄せられた「印象に残る観察会」を通して四〇年間の活動を記録したいと思います。自然への関わり方、観察会の運営方法等の変化や課題が見えてきます。

観察会についての感想やご意見がありましたら、特集の有無にかかわらずお寄せください。

観察会の思い出

片山 満秋

今から50年以上前のことだが、夏休みに県高校教育研究会生物部会主催の「水生植物観察会（?）」が館林市の茂林寺近くで行われた。教員になって間もない「青二才」の私も参加した。当時、自家用車は普及しておらず、専ら公共交通機関が利用されていたので、東武線の茂林寺駅前が集合場所だった。そして駅や線路の隣は水田が連続していた。

40周年特集 印象に残る観察会

目次

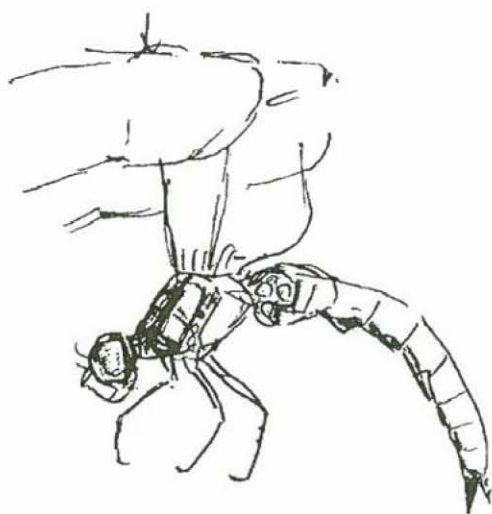
表紙 産卵するタマムシ
特集 印象に残る観察会
観察会の思い出
今は昔の話？
第一回自然観察会
自然観察会の思い出
道に迷った「シオジ林観察会」
自然観察会に思うこと
最初の自然解説
思い新たな自然観察会
自然観察会雑感

行事報告

自然観察教室『角田山』（4月10日実施）	角田山の植物	太田金山自然観察会（4月24日実施）	鳴神山清掃登山（4月29日実施）	相馬山清掃登山（5月15日実施）	清掃荒山高原登山（5月29日実施）	植物歳時記（54）ヤナギラン	図鑑の内と外 植物私記 30 ヒガンバナ	群馬の地質 屋根瓦にみる大ゆれゾーン	残された自然の中で（153）観音山鳥日記②	植物をミクロで見る（2）ヌマアゼスゲ	平成23年度総会報告	事務局日誌・事務局だより
小林志津子	里見 哲夫	矢島 克彦	神山 弘子	青木 桐江	畑村 誠一	吉田 龍司	佐島 英雄	飯島 静男	谷畑 藤男	青木 雅夫		
10	11	13	14	14	15	16	20	20	21	22	22	24

当日の講師は東京大学の大賀一郎先生（当時、理学部助教授？）であった。先生は若い女性の助手（と思われる）1名を伴って茂林寺駅に下車された。

ところで当時は、野外観察のときでもネクタイを締めた背広姿が権威ある学者のスタイルであった。当日の大賀先生は白い上下の背広姿で、確か、細めのネクタイを締め、白の上品な麻製の中折れ帽子をかぶり、革製の短靴を履いていたと記憶している。その身なりを見て、偉い学者というものは、さすがに違うものだなと思った。と同時に、このドロドロ道をどうやって歩くのだろうか、やや不思議に思った。



当日は真夏の晴天で、かなり蒸し暑く手拭いで汗を拭きながら歩いた。自分の服装については、ほとんど記憶がない。半そでシャツにズック靴でも履いていたのかも知れないが、とにかく蒸し暑い日であった。

観察会は、駅近くの水田のあぜ道から始まった。大賀先生は参加者に水田の中やあぜ道にある植物を中心に説明をされながら歩かれた。その途中で、参加者の一人が水田の中にある植物を指差して何事か大賀先生に尋ねた。すると大賀先生は靴を脱ぎ、背広と靴下を助手に渡し、シャツをまくりあげて水田の中に入って行かれた。そして質問者に確かめ、その植物を採取して戻り、泥水の滴る植物を手にながら丁寧な説明をされた。

参加者からは数多くの質問などが出されたし、「青二才」の私も生意気な質問をしたと思う。それらの質問についても、全く同じ態度で説明をして下さったことを、質問の内容は忘れたが、その情景は今でもはっきりと記憶している。

手足を泥だらけにしながらも、質問者や質問の内容を区別せずに真剣になつて応えらる先生の姿を見て、驚くとともに、学者・研究者というものの本質に触れた思いがした。

一流と言われる学者の「物事の取り組みに対する真剣さ」や「お人柄」の一端に触れられた思いがし、これだけでも、この観察会に参加してよかったと「青二才」は感激し、自分の今後の生き方の参考にしようと思ったものである。

観察会などで、参加者が指導者や講師に質問することがある。それに対して「何だ、そんなことが分からないのか」とか「今、説明をしたではないか、同じ質問をするな」とでも言いたげな表情や態度を露わにする指導者や講師を、ときたま、みかける。

説明を聞いても分からないから質問をしたのであり、中には説明が（下手クソで）分かりにくかったから質問したことだってあるだろう。

参加者からの質問（意見も含む）は、指導者や講師が観察会などで行った説明に対する、いわば「評価」であり、また「反省材料」が含まれて提供されていると考えるべきで、質問者は「感謝」されこそすれ、小バカにされる筋合いはないはずだ。

指導者や講師なるものは、高ぶらず、他を思いやる謙虚さが必要ではないか。そのように私は日ごろ思っているのだが、皆さんいかがでしょうか。

ところで大賀一郎先生は後に東京大学教授になられ、千葉市検見川において2千年前の地層からハスの種3個を発見された。このハスは2千年の眠りから醒めて発芽し、開花した。現在は「大賀バス」とか「古代バス」と呼ばれ、あちこちで栽培されている。「大賀バス」が咲いたという記事を見るたびに、当時の感激がよみがえってくる。

今は昔の話？

小暮 市郎

私が昭和四十六年から五十四年まで、赤城少年自然の家主催の観察会で案内役をしていた頃の話です。配布資料にいくつかの観察ポイントを示す際、必ず外輪山の一つ、鍬柄山の内壁（カルデラ内の急傾斜地）に形成された段々状地形を選びました。新坂平の車道から良く見えましたし、何よりもこの地形が動物の踏み跡によってできた特殊構造だからこそ、是非考えて欲しいことがあったのです。

新坂平は昭和二十年前後、軍馬や農耕馬の生産牧場でした。飼料の牧草栽培技術など進んでいなかった時代ですから、放牧された馬

たちは餌を求めて、牧場内を隈なく歩きまわした。元気のよい馬ほど、高度差を物ともせず歩きます。と言っても登るのが目的ではありませんから、直登はせず、横へ横へとトラバースします。何日も群れて歩いた結果、彼らの踏み跡がケモノミチならぬウマミチになったのです。この段々状地形に興味をもっていた私は、ある時、スイスの牧場の写真に同じ地形を見て、鍬柄山の場合も、人間が馬を使って地形を変えさせた実例と確信したのでした。人為が間接的にせよ自然を改変させることがあることを参加者に知って欲しくて、問題提起の素材にしたのです。

今は昔の話になりました。牧場は馬から牛の放牧に変わり、飼料も優れた牧草が入るようになつたせいとか、牛たちは急傾斜地を歩かなくなりました。必然的に、段々状踏み跡地形が見られたあたりは、カバノキ類やハンノキ類が優占する陽樹林になりました。いつの間にか遷移が進んだのです。

赤城山には、地蔵岳スキー場にも馬の踏み跡地形がありました。牧場だった名残りですが、スキー場が閉鎖されてから急速に森林化が進んでいますから、牧場だった証拠も遠くから消える運命にあります。



新坂平の牧場（鍬柄山から鈴ヶ岳）終戦後の写真【斎藤茂樹氏提供】

こう考えてくると、新坂平の名物レンゲツツジが、毎年、訪問者を楽ませるのは、牧場の牛たちが除草作業をしていてくれるからだと思ひ当たります。もし万一、牧場が閉鎖されたら、レンゲツツジは他の植物に覆われて衰え、観光資源としての赤城山の価値は激減するでしょう。自然界は綱渡りのようなバランスの上に成り立っているのです。

以上、自然界の仕組みの一端を述べましたが、自然の仕組みを知る意義の一つは、自然保護の重要性に気づくことにあります。そして、自然観察会はそのために有効なはずですが、私の経験では満足な観察会ができたことがありません。いつも失敗がつきまいます。昔も今も、永遠の課題なのかも知れませんが、私にとって、失敗が問題を改善するための原動力になっていることは間違いありません。

第1回自然観察会

1972年3月

谷畑 藤男

4月10日、角田山の観察会に参加した。ミスミソウ・カタクリ・キクザキイチゲなど早春の花々が山を彩り、日本海に向かっての下山も群馬では体験できないコースであった。吉田・関両担当の準備も周到であり、30名近い参加者も十分に楽しめたと思う。(詳細は小林さん報告参照)

40年の歴史を重ねた観察会であるが、「千里の道も一歩から」。記念すべき第1回自然観察会は1972年3月5日に行われた「裏

妙義縦走」。参加者は卯木・横堀・菊池各氏と私のたった4人。横川駅から妙義湖まで歩き、国民宿舎から籠沢を「丁須の頭」まで登り詰め、「赤岩」「烏帽子岩」などの岩尾根を南西にたどり「大遠見峠」まで縦走。峠から北面を入山集落まで下降するという長くハードなコースであった。観察会のマニュアルなど無く、雪をのせた浅間山を間近に見ながら、早春の岩峰をひたすら歩いた。この山行が印象に残るのは「浅間山荘事件」とリンクしたこともある。

妙義湖から「丁須の頭」そして「大遠見峠」までの裏妙義縦走コースは2週間前に「浅間山荘」へ向かう赤軍派の逃避路であり、翌日には群馬県警が彼らを追跡した道でもあった。登山者の少ない早春の岩場に弁当の新しい空箱が散乱していたことを憶えている。

第1回自然観察会が行われた1972年(昭和47年)3月前後は、「浅間山荘事件」以外に、も大きなニュースがあった。2月2日「横井庄一さんが28年ぶりにグアム島から帰国」し、3日には東洋初の冬季オリンピック札幌大会70メートルジャンプで「金・銀・銅を日本人が独占」した。第1回自然観察会や大ニュースも、昨日の出来事のような気がするし、遥

か昔のようにも感じられる。

自然観察会の思い出

吉田 龍司

他人にものを教えたり知らせたりすることは難しい。理解できるように幅拾い年齢の人たちに説明しなければならぬ。

自然観察会の指導を行なうようになって四半世紀は優に過ぎた。その間ただ、夢中になって詰め込んだ知識の一端を披露してきた。しかし今思うと間違った知識を伝えてきたことも儘あったようである。例えば立木に聴診器を当てて聞こえた音を、「根から水を吸上げる音」と解説してきた。これは指導員講習会の受売りで、研修生は皆、挙って聴診器を買い求めたものである。今でも時々たまこのような指導を行なっているグループもあるようだ。が、蛇口を捻れば水がほとばしる音はするが、根が水を吸上げる音などメカニズムからいってもあり得ない。それが解るまでに相当な年月が掛かったものである。実験によると木の幹に聴診器を当てると確かに音は聞こえるのだが、旗竿や電信柱に聴診器を当てても同じよ

うに音は聞こえる。思い込みの最たる間違いであった。

現在、自然観察会は申込み順の定員制で開催しているが、一昔前は現地に参加集合した人は総て受け入れて開催してきた。その結果、花の季節や、人気ある場所であると参加者は多数となる。実数が掴めぬまま、当日の観察会を実施したことは毎回のことであった。

ある年、日本百名山の一つ「四阿山」(通算3回開催)を始めて開催地とした時は、参加者も百名近い数になってしまった。遠方という事もありスタッフにキャンセルが出て四名しか指導者がいない。しかも植物担当は私一人で、あとは野鳥や動物の指導者だった。今日は大変なことになるぞと覚悟し、内心臍をかためた。

亜高山帯の登山はハードである。まして山道はまとまって話せるスペースなど当然ない。

従って指導者の周辺にしか解説が届かずクレームの連続であった。こちらは精一杯サービスしているつもりだったのだが、参加者はお構いなしで木や草の名の質問責め。挙句は山道ゆえ列が長くなり「この草の名は?」「声が届かない!」などと、質問が人伝に先頭の私にくる。その都度踵を返し、人を掻き分けて

質問者のところまで説明に戻った。「声は嘎れる」、「疲労で足はパンパンに腫れる」帰宅しても家の階段を上がれないほど疲労した。今は苦しくても懐かしい思い出であるが、当時は若かったので身体も無理が利いた。今であつたなら疲労死もの(?)であろう。

しかしそのような自然観察会指導(自然観察教室や、清掃登山を除き通算344回)の日々があつたればこそ、今の私の知的財産になつたと言つても過言ではないようである。

「何事も若いときの苦労が肝心」古来から言い継がれてきた言葉だが、今しみじみと噛み締めている。(事務局長)

道に迷つた 「シオジ林観察会」

関 敏雄

23年前の昭和63年8月21日、朝3時30分に家を出る。今日は上野村北沢にあるシオジ林の観察会。ここは昭和50年3月28日群馬県で定めた第1次の環境保全地域特別地区である。(自生シオジの北限に近いところから「シオジ学術参考保護林」に指定されている。)

当日の参加者は19名。午前8時集合し午後

3時解散の予定で、シオジ林入口付近に夫々駐車して出発する。保全地域の立派な看板を過ぎて30分位は踏み跡を歩くが、そこから先の道を見失い迷つてしまった。周囲を探すが道らしきものは無く、獣道らしきものを見つけては進む。本川、神宮両氏が先行し沢まで降り「ここに踏み跡があるよ」と叫ぶ。皆声を頼りに藪漕ぎをしながら急斜面を降りる。深山溪谷に來たようだ。少し進むと崖に突き当たり、今來た急な斜面を灌木につかまりながら戻る。こんなことを3時間も繰り返して、やっと平らな場所を見つけて昼食とした。周りは鬱蒼とした林と岩、近くに咲くホトトギスとイワタバコの花が心を少し癒してくれる。

昼食が終わるとまた藪漕ぎが始まる。登つたり降つたりで連続で、周囲の花は眼中には無くただ歩くのに必死だ。観察会というより探検に來たようである。小岩を超え、急斜面はトラバースし、シャクナゲの藪を漕ぎながら道なき道をひたすら歩く。歩いたり、休んだりの繰り返しで皆、疲れきってしまった。解散予定の3時は過ぎてまだまだ谷の中。

吉田(龍)さんが「あの尾根に道があるかも知れないよ」と急な崖をひとり直登する。午後5時やつと登山道に出た。登山道を辿り

車に着いたのは午後5時30分。参加者全員怪我もなく無事戻れたことにほっとする。参加者には小さな子供もいたが泣き言ひとつ言わずよく頑張ってくれた。

それ以後の観察会はこの教訓を活かし、必ず担当者が下見をしている。

今になつては「シオジの観察会」でシオジを見たのかは定かではない。

その後私がシオジを見たのは数年後の「袈裟丸山・寝釈迦」塔の沢自然観察会である。

連盟が実施している自然観察会はただ単に自然に接するためだけのものではなく、自然を通して自然の脆弱さを判っていただき、そのことが「自然保護」に繋がるものと考えからである。自然から得た知識が活動を通して後世に少しでも役立つよう、これからもスタッフ一同頑張っていくつもりである。

自然観察会に

思うこと

須田 けい

自然保護連盟に、こんなに長い間お世話になろうとは、思ってもいませんでした。止めたかと思つたこともありまふ。「なぜ止めなかつたか？」遊び場がなくなるからです。毎年のように同じところに行きますが、とてもいい事だと思つています。何年も後になつて感じる事が出来まふ。

入会したきつかけは、叶山でした。この山がなくなる？現在の姿を想像する事などとても出来ませんでした。最後の形などなおさらの事です。観察会よりも自然保護に対する興味の方が強かつたですし、調査に参加できる事が嬉しかつた。ダムが出来る？スキー場？鉄塔が建つ？…そして調査。殆ど山のなかでの調査です。体力的、季節的に厳しい事もありましたが、色々と貴重な体験をさせて頂きました。

観察会に参加するようになって、まず困つたのは大勢の人の前で話すことです。説明？みんなの前で？（そんなこと出来ません…

得意な人にして頂きたい）話の上手な人に説明してもらうのが一番です。上手く話せた事など一度もありません。

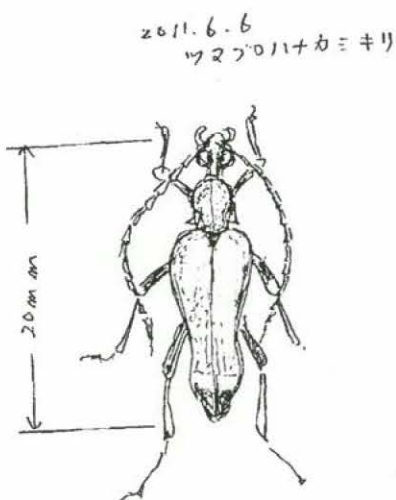
そんな私がなぜ指導員なんかにな？と思われるかもしれません。仕事上の都合でした。資格があつた方がいいだろうという事で、みんなて講習会に行く事になつたのです。自分が指導者になつて考えた事もありません。そんな言葉は私には当てはまりません。

人と話をする事が嫌いではないので、皆さんと沢山話をしたり聞いたりしていきたいし、そろそろ忘れる事が多くなつたり、思い出せなくなつたりしているの、リハビリ中のサポーターとして、お手伝いしていきたいと思ひますので、よろしくお願ひします。

最初の自然解説

亀井 健一

定年退職後、ようやく自由の身になり、兼ねてから興味を持っていた自然観察に、しばしば出かけるようになった。自然保護連盟の観察会にも時々参加した。野外で気ままに活動することが、こんなに楽しいものかと改め



て感じた。その時聞いた植物名などは、その場でメモをとり、後でそれを図鑑で調べて確認する。ときに、現地を再び訪れて図鑑と突き合わせ確認することもある。こうするのも観察会参加と同じぐらい楽しいものだ。次第にのめりこみ、まだ早いのではないかと思いつながら、自然解説をしてみたいと思うようになった。

もう十数年前になるだろうか、連盟主催の自然観察会が鼻曲山で開催され、私も参加した。連盟に入会してまだ日が浅いのだが、卯木さんから解説をやってみないかと言われ、解説する側の末席に並んでしまったのである。自信があるわけではなく、しまったと思ったが後の祭りである。内心、どきどきしていた。

名前を知っている花もあったが、知らない花が見えると、どきまぎした。質問されて答えられないと恥ずかしいという気持ちもあった。その前を足早に通り過ぎたり、そこを避けるように歩いたりして質問されないようにした。そんな思い出のある鼻曲山観察会であった。

今はどうかと言うと、知らない植物があっても、そんなに苦にならなくなった。ずうずうしくなったからではなく、多数ある中で知らないものがあるのは、むしろ普通のことと

思えるようになったのである。博覧強記よりも、知らないものがあれば、それをどう調べるかが重要ではないかと思う。

今は知らないものがあると、参加者に尋ねるようになった。ときに参加者が適切に答えてくれることがある。そうしてもらうと、自分の勉強にもなりありがたい。また、和気あいあいの雰囲気生まれ楽しい観察会になると思う。自然観察会は、解説者側と参加者側がともに学び合う場と思っている。もちろん、自分の努力を軽視するわけではないことは言うまでもない。

思い新たな

自然観察会

金井 賢一郎

私の手元に群馬県自然保護連盟が実施した自然観察会参加者に配布した冊子がある。数えてみると28冊。よごれたもの、破れてつくろったもの、たくさん書き込みのえられるもの、雑多である。しかし、何となく愛着が重なり、清しい思い出が……

自然観察会の計画立案では、場所選びに悩まされる。まずは楽しくて、珍しくて、個人

では行きにくいところだ。その上、駐車場・トイレの完備、それでもできるだけ広くて数の多いことが必要条件である。アンケートでの要望を考慮すると数多く出される実施希望案はどんどん狭まってしまふ。事務局や理事会では最初で最大の悩みである。加えて当日の天候の良否である。参加希望の広報も以前は実施年が1月～12月だから思うようにいかないことが多かったようだ。苦勞しても好天気ならば100人超の参加者でにぎわった。似た目的で集まり、観察会を通して新しい仲間、コミュニケーションの場が生じたことに喜ばしさと楽しみを感じたものである。

「これまで何気なく歩いていた場所やまわりの様子を眺める目を変えないといけないと思う」

などと話されると一層の責任の重さを感じる。

数年前から、参加を「申込み方式」に変えてきたが、相変わらず希望者が多いことには喜ばしい。こうして継続されてきた自然観察会である。

今でも特に筆者の思い出に残る観察会は、

- 1 湯檜曾川（水上町）'98年6月7日
- 2 花咲湿原（片品村）'01年9月9日

3 稻含山(甘楽町) '01年10月20日

4 大峰沼(月夜野町) '04年6月13日
であろうか。

湯檜曾川では実施のあと8月に集中豪雨が
あって大出水のため川原の状態が変わり、モ
リアオガエル・カジカガエル・ユビソヤナギ、
ブナ林・川原の石の形のことなど説明のあつ
たものの様子が変わってしまった。

花咲湿原では、ノアザミ・モウセンゴケ・
チョウジギク・ミズギボウシ・リュウキンカ、
ウメバチソウ…の花々で心が洗われた。後年
の大雨により道路が不通になり、個人的にも
以後出かけていない。8月末になると思い出
す場所の一つである。

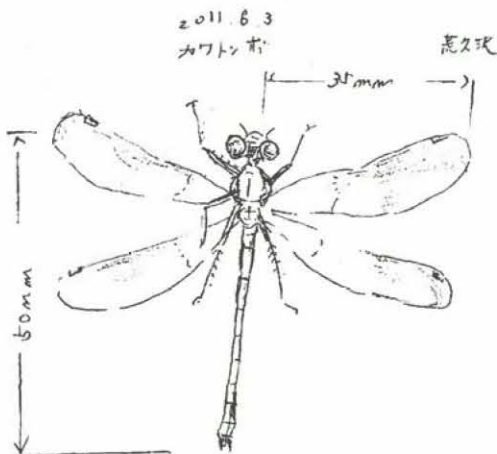
稲含山は、この日前夜から降雨が続いてい
たので中止の予定だった。それでも数名の参
加者がいた。中止を確認したが希望もあつて
指導者と一緒に3名が山に向かった。2名は
帰途、近くの雄川に寄って両生類(ナガレタ
ゴガエル)を観察した。別の思い出に残る観
察会になった。

大峰沼は、親子自然観察会だった。テーマ
は「新緑(6月の植物)とモリアオガエルの卵
塊・成体の観察」。大峰沼を形成する地形・
岩塊・植生・野鳥・両生類など環境を学び、

親子、子供どうしの自由観察では「成体みつ
け」「卵塊数くらべ」で楽しんだ観察会だつ
た。親子、家族で50組ほどの参加者だった。

冊子をひろげると指導にあたった方々に懐
かしい名前がたくさん並んでいる。高齢だが
現在活躍中の方々、すでに故人となられた方
などさまざまな人生がうかぶ。ひと刻だが一
緒に歩いた当時の様子が走馬灯のように甦つ
てくる。この文を書きながら、さまざまな想
い出を呼び起こす時間になった。

新しい時代がどんどん変わる。観察会の継
続は、会員の皆さん多数が望んでいる。内容
の工夫を含め、一層の飛躍へむけてすすめて
いく必要がある、と私は思っている。



自然観察会雑感

齋藤 次江

初参加は平成十四年七月の四阿山でした。
ハイキング気分に参加したのですが、高山植
物、樹木、チョウ、昆虫のことを見聞きし、
多種多様の自然に感動しました。

配布されたしおりに書き留めた『ゴンズイノ
フクレアブラムシ』とか、その生態とか、ま
ず、講師の先生方の知識の豊かさに驚きの連
続でもありました。

浅間隠山での観察会では『冬虫夏草』を歩
きながら見つけることの出来る講師に、本当
にこれ、今見つけた物ですか?等と失礼な質
問をしてしまい、深く反省しています。

張り切って出かけた草津芳が平の観察会で
は、参加人数のあまりの多さに講師の話が遠
くて聞き取れず、がっかりして帰路に就いた
事もありました。

それからしばらくの間は、『これ何?病』
で、教えてもらう為の観察会参加でした。
(これは現在も続いてはいますが・・・)
最近の自然観察会では出来るだけ『?』を

持ち帰ろうと思っています。

自分で調べて解決できたときは、格別の嬉しさです。

次の観察会はその結果を各分野の専門の先生に確認し、意見を伺う場でもあります。

また、自然観察会だけが自然観察の機会ではなく、日常の自分の生活圏内にある自然が面白いとも思えるようになりました。

私の知らない自然が山ほどあるので、自然と向き合い、観察会に参加したいと思っています。

行事報告

4月10日実施

自然観察教室

『角田山』に参加して

小林 志津子

東日本大震災・巨大地震（千年に一度とも言われる）の約一ヶ月後、余震がまだ時折あるそんな中での参加でした。当日の朝5時、上信バスで新潟県新潟市西蒲区の角田山を目指して出発しました。

自然観察教室の案内には角田山の概要とし

て新潟市西蒲区にあり、別名「長者原山」と言われ、越後平野の北に位置し標高四八一・七mの低山である。子供や年輩者でも比較的に容易に登ることができるともあり、登山者は年間15万人を超える人気の山であるとありました。

バスに乗ること約3時間後、無事に登山口に到着し桜尾根コースを8時20分に出発し登り始めました。案内にあったとおり、カタクリの花とミスミソウ（雪割草）の可憐な花姿のお花畑が山の斜面いっぱいに出迎えてくれました。事務局長さんが歴史的見地、生物学的見地から詳しく説明してくださって聞き入りながらもメモをとる余裕がなくて、ひたすら頂上を目指して歩きました。

頂上に着いたのは、10時40分でした。頂上は明るく、暖かく、広い広場になっていて、人気の山らしく、大勢の登山者と出会いました。お昼をおいしく食べて下山の途につきました。粘土質と石ころの岩山を必死に滑らないよう、安全にと言いつつも聞かせて歩きました。11時20分から灯台コースを歩いて下山しました。角田浜に向かつて灯台と海の素晴らしい景色をみながら、13時30分頃無事下山ができました。帰路は藪樺の赤い花が印象的でした。また何

万株に一輪しか見られないという白カタクリの花を見られ、感動も一塩でした。

海は何事もなかったように静かな美しい海で、震災の大津波の事と対峙してみると自然のすばらしさとむごさを複雑な思いで受け止めました。美しい春の可憐な花達との出会い、登り終えたときの充実感を満喫し、とても良い一日を過ごす事ができました。バスで行く時には夢中でしたが、帰りの車中から見えた景色は関越道の三国トンネル手前付近、湯沢中心に白銀の雪景色で、里は桜が咲き春爛漫だったことを思い出し、感動すると同時に不思議な気持ちがありました。安全に導いてくださった自然保護連盟の皆様、一緒に登った皆様に心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、次に書くお花が咲いていて私達の心を癒し、魅了してくれました。カタクリの花（種から花開くまで平均8年くらいかかる。ユリ科の宿根草で春の女神とも言われる。北向きの山の斜面に花が咲き地中鱗茎から片栗をとる事ができる。葉には油点がある）、ミスミソウ（雪割草）はもちろん、キクザキイチゲ、アオキ（女木・男木）、ヤブツバキ、ニリンソウ、エチゴエンゴサク、ユキツバキ、ウグイスカズラ、ショウジョウ

バカマ、イカリソウ、トリカブト、アブラチャ
ン、シュンラン、何万株に一輪しか見られな
い白カタクリの花をみることができました。



『角田山』自然教室参加者

角田山の植物

里見 哲夫

楽しみにしていた角田山の自然観察教室が
天候に恵まれて無事に実施できたことを喜ん
でいる。今回は、標高0mを出発点としての
登山、こんな機会に恵まれた経験者は何人い
ただろうか。目指す山頂は481.7m、あ
の急登と一部の残雪、それに前日の雨で粘土
質のどろんこ道を全員が無事、事故なく征服
出来たことは素晴らしい。二度と経験するこ
との出来ない貴重な体験であったことと思っ
ている。ここに、ご苦勞を戴いた役員の方々
に心からの感謝を申し上げるところである。

車中から朝日に輝く谷川岳の素晴らしい雪
景色を眺め、関越トンネルを抜けると一挙に
銀世界、バスの進行を妨げる真つ白な蒸気、
さぞ、運転手さんのご苦勞があつたことと思
う。豪雪地帯を通り過ぎると越後平野となる。
田圃には北国へ帰る途中で餌をついばむオオ
ハクチョウの姿も見られた。この地方は雪が
消えると同時に、田植への準備に取り掛かる
一時の間でもある。こんな情景を眺めながら

目的地へと近づく。バスはいよいよ海岸線へ
と入り、両側は潮風にさらされた厳しい断崖、
立岩、雷岩などの奇岩を眺めながら角田灯台
下の駐車場へ到着した。諸準備を整え登山に
取り掛かったのは8時30分頃だったろうか。
道はすぐに急な登りとなる。

野帳を出してメモするのも大変だが、記録
することは大事な仕事である。トラノオシダ、
クマワラビ、オクマワラビ、ベニシダ、コタ
ニワタリ、ヤブヤマソテツなど。その上部に
はアオキの雌株、雄株が多数目につき、一応
ヒメアオキと見た。日本海型気候域の多雪地
に生える、背丈の低い、幹は斜上し、葉は小
型のもので、アオキの変種ヒメアオキのよう
だ。アオキは日本特産の雌雄異株の常緑低木
で、染色体は4倍体という。

暖地性のシロダモが多いが、この地域は日
本海要素の植物と太平洋要素の植物が入り混
じっている。これは暖流の影響によるもので、
植物分布上興味深いものがある。今日の植物
観察の中心となるミスミソウ（一名ユキワリ
ソウ）、キクザキイチゲ、カタクリ、シヨウ
ジョウバカマなどが段々と目に入ってくる。
登るにつれて数を増し、見事な群落が目前に
広がり、充分と堪能出来たものと思う。その

素晴らしさに共感すると同時に、花の色の濃淡や色違いなどにも目を輝かした。幸い、白花のカタクリにも巡りあえた。スミレサイシン、タチツボスミレなども出てきた。他に、花が見られた草本として、エンレイソウ、ミチノクエンゴサク、ヤマエンゴサク、オウレン、シュンラン、コシノカンアオイ、オオコガネネコノメソウ、キジムシロなどがあつた。キジムシロをエチゴキジムシロとした説もあつたが、両種の違いは、キジムシロは小葉が5〜9個、エチゴキジムシロは小葉は5個で、下方の一对は小さく、消失することもあり、葉は薄い。2カ所程で開花しているのを見たが、灯台近くの岩場近くのをよく調べたところエチゴキジムシロではなかつた。従つて、キジムシロと訂正をしてお詫びする。その他、主な植物としてコシノチャルメルソウ、キカラスウリ（枯れた実が数個垂れ下がつていた）、テンニンソウ、トリカブト（種不明）、メノマンネングサ（岩場に多数あつた）、サイハイラン、アマドコロ、オオウバユリ、ヒメニラ、アサツキ（種不明）、チチツパベンケイソウなどがあつた。テンニンソウは、標高400m付近一帯の登山道（往復）の両側で、高さ50cm程の枯れた果穂のため気付かな

かつたことと思う。シダ植物としてはヒモカズラ（岩場）、フユノハナワラビ、オオバノイノモトソウ、オニヤブソテツ、サカゲイノデ、ミサキカグマなどを見た。

木本で花の見られたものはアブラチャン、タムシバ、オオバマンサク、ヒサカキ、ナニワズ（一名ナツボウズ）、ヒメアオキなど。その他、注目すべき木本としてハイイヌガヤ、チャボガヤ、オオバクロモジ、エゾアジサイ、ハマナス、エゾユズリハ、タニウツギ、アカミノイヌツゲ、シラキなどがあつた。特に、山頂近くの登山道で神宮氏他数人が疑問視していた木はシラキであつた。気にかけて帰りに道で枯葉を拾いやつと分かつた。

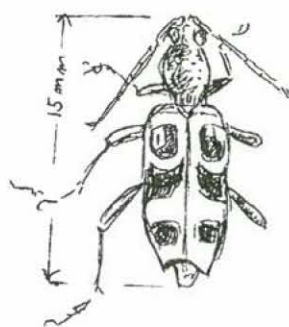
その他、キツツキの被害木がアオゲラの仕業であることを谷畑氏から、オニグルミの果実をかじつて穴を開けていたのがアカネズミであることを関氏から教えて頂いた。

また、大変勉強になつたのは灯台上部一帯の見事なカシワの風衝地低木林であつた。斜面に広がるカシワ林は、上部から断崖に近づくにつれて段々と矮小化している。これは自然環境の厳しさによるもの、その実態を垣間見ることが出来た。ここ一帯の岩場は、安山岩質凝灰角礫岩でヒモカズラ、メノマンネン

グサ、その周辺にアサツキなどが多数見られたが、他にも珍しい植物が見られるのではないかと思つてゐる。

上部カシワ林の反対側にはカシワは見られず、登山道を挟んで全く違う植生で、ヤブツバキが群生し多くの花をつけていた。この地のツバキは全てがヤブツバキであつた。ユキツバキは豪雪地帯で発見されたもので、ヤブツバキの変種である。常緑低木で、高さ1〜2m。枝は折れにくく、地についたところから根が出やすいといわれている。葉の縁には細かな鋭い刻み（鋸歯）がある。

この山は、植物分布上非常に興味深いものがあり、時間をかけてゆつくりと調べて見たいと痛感している。急な登り道のため列が長くなり、失礼のあつたことをお詫びするものである。出来得れば上記の植物について図鑑を参照し、観察会の思い出にして戴ければ幸いである。



エグリトウカミキリ
(カミキリムシ科)
Chlorophorus japonicus

4月24日実施

太田金山丘陵

自然観察会に参加して

矢島 克彦

今回4月24日の観察会に参加し、久しぶりに森林浴の恩恵に預かる楽しい時間を過ごせました。また指導者の方の心配りで30名弱の参加者は有意義な勉強会ができたと思います。お疲れ様でした。

当日は、観察会日和とも言える天気恵まれ、時節柄樹木の芽吹きも盛んで、若緑のリフレッシュと言った処です。心洗われました。

行程は出発地点から山頂まで2時間半かけて登り、道すがら出会う植物・昆虫等をその都度学習しました。金山丘陵は植栽された園芸種も大分多いが、里山としての丘陵で見ると自然が比較的よく残されていると言われ、この日は運良くオオタカが飛ぶのが目撃された。また山頂から富士山・スカイツリーを見ようとしたが霞んでいた。展望台からは北部運動公園の咲き揃った芝桜を眺められました。これを機に自然の植生にも関心を持ってみようと考えています。

4月29日実施

鳴神山清掃登山

花と若葉を楽しむ

神山 弘子

鳴神登山は二度目だけれども、駒形登山口は初めてです。参加申込みをしたのは巨大な東日本大震災発生後の3月11日の午前でした。

4月29日(金/祝)は地元友人三人と一台の車で現地駐車場に着きました。天気が良くて鳴神山を目指す人たちの車で混雑が始まりつつありました。今回の清掃登山・観察会の参加者の駐車場内に一般登山者の車が入ってしまい、二進も三進も行かなくなりました。「清掃登山参加者」と判る看板があれば避けられたと思われます。

清掃登山と自然観察会に参加するようになって、今回が二年目で四度目の参加です。登山歴も二年目です。観察登山が大好きな理由が二つ有ります。一つは草・木の名前を覚えられること。主に自宅周辺で見かける草木の名前が判るのは、顔見知りの人の名をスラスラと言えた時の爽快感です。

もう一つは、先生方の解説を聞かせて頂いている時は体力の温存が出来るので、一日の

予定を最後まで楽しめることです。

鳴神山での期待はカッコソウ(勝紅草)とナルカミスミレ(鳴神堇)でした。

鳴神頂上から仁田山へ移動し、御籠洞と呼ばれる場所で昼食になりました。昨年九月に足馴らしと称して、先輩の指導で登り、同じ御籠洞で昼食にしました。その時見たコの字型の石垣が、三月の巨大地震の影響か、石垣の一部が崩落していました。

カッコソウの群生地は尾根から少し谷側に下った所に在りました。意外に高地に在るんだと思いました。私の知るサクラソウ自生地とはサクラソウ属とはいえ、全く違う環境です。残念ながら花はまだ硬い蕾でした。

ナルカミスミレは何度も「これですか?」と問えば、その都度「ヒトツバエゾスミレ」との応答が返ります。最後に「同じ物の仲間ですよ」と言って頂き幸福感を味わいました。とても甘くて良い匂いのスミレも同じ参加者に教えていただきました。

仁田山の稜線は、梅田と川内の分岐点まで、得も言われぬアカヤシオのトンネルでした。下山途中で出会った人に声をかけたら今年のヤシオは「見事です」と返事が有りました。幸運に恵まれた二年目登山の始まりです。

○注 ナルカミスマシレはヒトツバエゾスマシレの変種。白化個体で俗にいう素心。花は白色の稀な固体です。(事務局)

5月15日実施

相馬山清掃登山に

参加して

青木 桐江

5月15日、雲ひとつない良い日でした。新緑がまぶしく、五月晴れで良かったです。女性3人で参加させて頂きました。相馬山の登山口集合、どこかな?迷ってしまいました、参加者が予定よりいっぱいとの事、人気の山なのでしょう?子供さんからお年寄りの方々40名との事です。一〇四m相馬山に向かいざ出発です。

登りは怪我などすると大変なので下りに清掃登山して下ってくるよう、指導の先生にいわれ、植物の名前の説明を聞きながら、楽しく登っていききました。モミジやカエデ、人名前、マユミに小さな花がついていました。アジサイの花に似た白いオオカメノキや可憐に咲くスマシレ、色々説明して頂きました。その時は覚えたような気がしましたが、少し経つとなんだっけ?って感じで3個くらい覚え

て帰りましようと思いました。

先生が3、4人来て下さり、聞けばなんでも答えてくださりうれしいです。高さ4mほどの赤い鳥居がありました。急に登りがきつくなり、階段状の岩場や鉄鎖や鉄の梯子があり踏み外さないよう、一步一步気をつけて登りました。岩場が苦手な人がいますが私は好きで愉しくなりました、私だけ?

信仰の山なのであちらこちらに石碑があらんとなく神々しい雰囲気漂ってます。息を切らせながら登り詰めると山頂の黒髪神社が見え、お願いすれば髪が黒くなるのでしょうか?頂上で少し辺りをみまわすと今日はなんとなくよんでいるのか、富士山はみえなかつたです。少し早い昼食をとって、下山にむけ準備していたら、県警のヘリコプターが山のまわりをぐるぐる何回もどんどんこちらに近づいてくるような又、遠くなったり

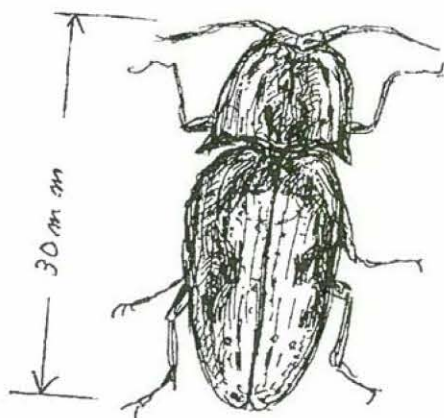
事故のようらしい、先生がけっこうあるらしいと私ははじめての経験でヘリが気になつてしかたなかつたです。

同じ道を下山して途中、マイヅルソウがいっぱいの所があり咲けばきれいだろうなと思いい赤い鳥居のあたりから、ゴミを拾いはじめました。思ったよりゴミがないのでよかつた

です。集合場所あたりにたばこの吸い殻が少しあつたくらいで、私は今回は拾えませんでした。一人の事故もなく楽しい一日でした。

ご指導、ご引導下さいました、群馬県自然保護連盟の先生方、色々ありがとうございました、これからもよろしくおねがいします。

楽しい登山でした、一日ありがとうございました。又、機会がありましたら参加したいです。



2011.6.1
ウバタメコメツキ
Alaus berus

5月29日実施

荒山高原

清掃登山と自然観察会に参加して

畑村 誠一

5月29日(日)、台風2号の接近と梅雨前線の活動により、前夜からの雨がやまず、朝から雨模様。天気予報では一日中雨の予想。実施が危ぶまれたが、とりあえず目的地に向かうと、既に案内の方がおり実施すること。悪天候のため参加者は少なめ、役員の方4名と一般参加者3名とグラフぐんま広報の方を含め総勢8名という最適人数で、雨の中観察会と清掃登山が開始されました。

晴れの日とは違った雨の日ならではの光景を楽しみながら、一行は荒山高原を目指しました。登山道の草木や花など雨に洗われ、いつもより色あざやかに見えました。紫色のトウゴクミツバツジが満開で目にまぶしい様でした。ヤマツツジの赤いつぼみも又きれいでした。あつという間に荒山高原に到着、しばらくの休憩後もさらに雨足が強くなり、これ以上登るのは危険だと、リーダーの神宮さんの判断で下山と決定しました。悪天候の時の判断と、やめる勇気が必要と思いました。

近年登山者のマナーが良くなり、登山道にはほとんどゴミはなくなっています。しかし一般の観光客の多い駐車場周辺にはまだ、たくさんのゴミがあります。今回の清掃登山&観察会で美しい赤城、そして群馬の自然を守り、後世に残す一助となってくれる事を望みます。又、こうした活動が多くの人の手で長く続くことを期待したいと思います。最後に拾ったゴミを駐車場で缶、ペットボトル、燃える物、金属物などに分別し、予定より早く終了しました。雨の中、参加した役員の方、一般の方、大変お疲れ様でした。

植物歳時記 (54)

ヤナギラン(柳蘭)

吉田 龍司

燎原の火に似て咲けり柳蘭 龍司

夏の高原を彩る花にヤナギランがある。山小屋や旅館関係者にとつて、この花の開花は夏到来の指標植物として重要であるらしい。それというのは夏山の客の最盛期につながるからで、「客花」「お客花」と呼ばれているところから推測できる。

名前は葉が柳に似て、花はランのように美しいことから名付けられたと思われるが、ラン科の植物ではないことは言うまでもない。このような和名の付け方は、スズラン(ユリ科)やクンシラン(ヒガンバナ科)にも見られ、ヤナギランもその手の一つと云える。

英名はファイヤ・ウィード(火の雑草)で北半球の温帯及び寒帯に分布し、アジア、ヨーロッパ、北アメリカなどの代表的な北方植物である。わが国においては北海道、本州の中部以北に分布する。針葉樹林帯のやや湿潤な草地を好み、草原に群生するその光景は息を呑む素晴らしさで、万人を魅了する。夏には誰でも一度はお目にかかったポピュラーな植物である。伐採地や山火事の裸地にいち早く入り込むパイオニア植物で、樹木が生い茂ってしまうと生きられない。真の陽好植物といっても過言ではない。



ヤナギラン

学名はエピロビウム・アングスフロリウム。

ギリシャ語の「スミレ色の花が長い子房の先に咲く」に由来するとか。エピロビウムとは「アカバナ属」で、マツヨイグサなどと同じアカバナ科の植物である。小種名の「アングスフロリウム」は「狭葉の」という意味で柳の葉に似た姿からリンネが名付けた。それゆえ別名に「ヤナギソウ」とも呼ばれ、むしろこの名の方が相応しい。

この属は日本には15種ほどあるが、花柱の先が4裂するものはヤナギランの他にはオオアカバナ、エゾアカバナだけである。

花期は7〜8月。草丈は1〜1.5m、葉は長さ8〜20cm、幅は1〜3cmで互生した葉を多数つける。数多い側脈は縁（ふち）の内側で連絡し、葉は内側に巻くので鋸歯は目立たず、葉の裏は白っぽいのが特徴である。

花は紅紫色で径2.5〜3cmの房状の花が下から順に咲き上がる。ガク片4（花弁より色は濃い）、花弁4、雄蕊8、雌蕊1で構成され、子房はガクの下にあって白毛を密生し細長く、まるで花の柄のように見える。花は蕾の時は垂れ下がる。開花時、柄が斜めに上向き、花は横向きに咲く。花期が終わると腺毛を沢山つけた姿に変わっていく。この時期綿毛に覆

われた姿が、銀色に輝く海のように見えるのもこの花の見どころの一つといえよう。

ヤナギランは雌性先熟。つまり自分の花粉では受粉しない仕組みになっている。花が咲くと直ぐ雄蕊だけ花の前に突出て花粉を出す。その時点の雌蕊は下を向いたままで、花粉を受け入れる態勢になっていない。数日たつと雄蕊は花粉を出し切り、だらりと垂れ下る。代わりに雌蕊はくると向き直り、先端は4つに割れて花粉を受け入れる状態となる。自分の雄蕊は萎（しお）れて、自家受粉しない仕組みとなる。キキョウやホタルブクロと同じ仕組みといえる。これとは逆に、雌性先熟する植物には、キンポウゲやオオバコがある。覚えておいて損はないので記しておこう。

果実は花が終わると10cmほどの蒴果となり、種子は白い毛（種髪）で飛び散る。蒴果は2真皮以上の子房が熟した果実で、果皮が乾燥すると薄い皮となって真皮の数だけ先端から裂け飛散していく。

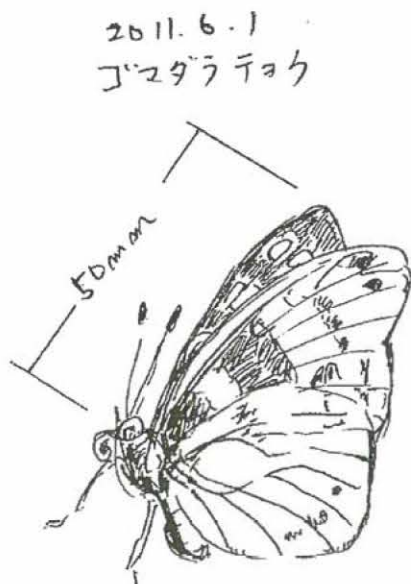
国や地方によつてはヤナギランもいろいろに利用された。葉はその香気が好まれ茶の代用品に利用された。薬用では茎や葉が胃腸薬になるといふ。若い茎はアスパラガスのように調理することができ、また若葉はサラダや

野菜炒めに利用されてきた。ものは試し一度挑戦されてはいかがであろうか。

田中肇氏の研究によるとヤナギランに集まる昆虫は、昼はマルハナバチ、夜はマエアカスカシノメイガが記録されている。

ヤナギランの方言について調べてみたが、日本植物方言集成「八坂書房」や、他の文献を限なく当たつても記載がない。世間一般に知名度の低い植物と推察するのが妥当であろうか。

・花言葉 「集中する」 「焦点」
・誕生花 七月三十一日



図鑑の内と外

植物私記 ③〇

佐鳥 英雄

ヒガンバナ

私の次女は、〈赤い靴〉の一番を、「赤い靴はいてた女の子 いい爺さんにつれられて行っちゃった」と歌っていたという。童謡とか歌謡とかは、学校やカラオケ教室などで正式に勉強でもないかぎり、この種の思い込みや勝手覚えはおびただしく、私も例外ではない。私の歌のレパートリーは平均以上だと思っていますが、その99%は耳学問。かなりト伝流です。先日、〈影を慕いて〉（なんと古いことでしょう）を本で見えていたら、2番が「わびしさよ せめていたみのなぐさめに」とありました。あれれ…。私はずっと、「せめて心のなぐさめに」と歌ってきたのです。昔のこと、1996年12月3日の朝日新聞に、松島詩子の葬儀の記事がありました。葬儀には、〈マロニエの木陰〉が流れていたとのこと。「出棺。旅立つ松島さんをやさしく包むように〈マロニエの木陰〉の歌声が流れる。」

♪彼方遠く 君は去りて 我が胸に残る いたみよ…。これが記事の終行。私は「残るひとみよ」と覚えていて、腑に落ちません。念のため、手許の〈日本歌謡集・時雨音羽編〉を当たりますと、やっぱりそうなので、おせっかいにも一筆してみました。その返事は、「両方あります」ということでした。こんな場合、作詞家の原稿でも残っていれば片付くことでしようが、それがなければ片付くことがないでしょう。歌の元歌や原詞など研究されている人はいるのかどうか。

この〈両方あります〉も結構ありそうで、私がすぐ思い出すのは、ディック・ミネの〈夜霧のブルース〉です。この歌、島田磐也作詞、大久保徳二郎曲ということ、私なんかなんとなく戦前の歌と思うのですが、解説によれば1947年（S22年）〈地獄の顔〉という映画の主題歌とか。私は中学3年生。巷には進駐軍があふれ、私の学校にも純金の腕輪をした色白の男の子が一人入って来ていたりしました。狭い道を走るキャディラックとかポンティヤックとかいう自動車からはラジオの音が聞こえるなど、異文化に圧倒されながらも、貧しいなりに解放感のある青春が始まっていたのです。そんな私の心の耳に、このブルー

スはすぐ入り込んできたのでしょうか。映画を観た覚えがないので、たぶんラジオからでしょう。〈どうせ俺らは ひとりもの〉日本の流行歌に多いというちよつぱり捨て鉢な孤独感。〈夢の四馬路かホンキユの街か〉という、やや意味不明ながらエキゾチックな文句、〈何も言わぬが 笑ってみせる〉という、ダンディズムなどが、その低音の魅力とともに私を捉えたのでしょうか。今でも私の愛唱歌のひとつです。

ところで、この歌の3番は、「花のホールで 踊っちゃいても 春を持たない エトランゼー 男同士の 相合傘に ああ嵐呼ぶよな夜が更ける」です。この歌詞の〈春を持たない〉が気になったのは、いつの日の頃だったのでしょうか。たぶん30代の頃のこと。何となく踊っているエトランゼーは、娘さん。その子が春を持たないなんて可哀相…。という気持ち。それに、春を持たない人なんているだろうか。春はもろ人にひとしなみに来るハズだという理屈など。で、私は、〈春を待たない〉と読みかえて歌うことにしていました。考えてみると、このエトランゼーは〈俺ら〉のことでしょうか、夜霧の中へ涙のリラの花を投げた〈あの娘〉でしょうか…。俺らのように

も見えてきますから、そのエトランゼーの俺らが、めぐり来る春にはもう花のホールにはいない、つまり春を持たない…で、つじつまが合っているのかもしれない。

そんなことが気になって、少し本を当たってみました。

春を持たない

〈昭和のなつめろ415・梧桐書院〉など

春を待たない

〈本の題名は忘れましたが、全音楽譜出版のありました。その本屋に再調査に行ったのですが、本は見つかりませんでした〉

誰でもそうでしょうが、中学・高校の頃は記憶力抜群の時期で、私の場合も大概の歌は一回耳を通ればそのまま録音される…といった仕組みでしたから、片っ端から覚えていったようでした。すぐ上に姉が2人いて、女学校で覚えてきた歌をよく歌っていましたので、女学生愛唱歌も沢山知っています。私が老人のいまもちよっぴりめめしいのは天稟としても、こんな環境も多少は加算されているようです。それはともかく、私の場合、歌はみんな耳学問。ずいぶんと思ひ込みや勝手覚えです。高校時代のこんな記憶もあります。

—おい、佐鳥、〈流れの旅路〉の歌詞を覚えてくれ

—OK

私はFが差し出した紙片に、この歌の1・

2・3番をさらさらと書いてゆきました。

♪赤いマフラーをいつまで振って 名残り

惜しむか あの娘の馬車は…

2番 ♪旅の一座の 名もないスター

リラの写真の さみしい顔よ

書きながら、どこか変…でした。でも、その時には他に思い当たることもなく、そのままとりました。ずっとずっと後のこと。私が30代か40代のこと。「リラの写真」は「ビラの写真」の誤り…であることは気づいたのですが、時すでに遅し…でした。そのFももうへかなたの よき地に眠りました。

こんなことを記せばきりもありません。つい先日、ちよつとしたエッセイを頼まれたのですが、題をへあとから しみじみとしました。少し昔のフォルクソングのような歌の文句を借りたのですが、先日、ある農産物直売所にいましたら、この曲が流れていて、耳をすませてみますと、♪青春時代が夢なんて あとから ほのぼの 思うもの…などと

歌っているのです。私は文章の中でへうろ覚えの歌だ」と断つてはおいたのですが、やっぱりほんのり恥ずかしい。

それにつけても考えるのは、昔の人はこんなにまちがいはやってないぞ…という思い。現代人は昔の人の数百倍くらいの情報を相手にしながら生きてるので、仕方ないのかもしれない。これは歌のことではありませんが、先日ある新聞で、「アメリカでは自動販売機はほとんど見かけない」と読んで、感心していたのですが、同じ新聞で数日後、「日本はアメリカに次いで自動販売機が多く」の記事に出会って、混乱してしまいました。まことに真実は手に入れたがたく、半端な努力では心の門をくぐってくれないものなのです。ヒガンバナではそのあたりがどうなっているのでしょうか。

ヒガンバナについては、すでに論文・エッセイ・ニュース記事数知らずというところですから、私もいろいろと読んできたように思います。この草、前川文夫博士のいわゆる史前帰化植物として扱われることも多いのですが、あの論文では、むしろ中世帰化植物扱いと見るべきでしょう。ところで、このヒガンバナについての諸説紛々たるものを要約する

と、次の5点になると私は考えます。

1 3倍体なので種子はできない。

(中国には2倍体があるともいう)

2 少し離れたところやかなり離れたところで増えてゆくので、栄養繁殖ではない。

(私の場合、山岸(正子)さんや、小林

(光子・テルヨ)さんの証言)

3 全くなかったところに発生する

(私の場合、下城(セイ子)さんや松本

(英子)さんの証言・いずれも家の庭)

4 ジェネット(この場合遺伝的に同じで

地上に群れとなつている)中には小さな球

(鱗茎)が混ざっている。鱗茎は大きいも

のでも小さいものでも中央から分球する。

5 シロバナヒガンバナ(シロバナマンジュ

シャゲ)はヒガンバナとシヨウキズイセン

の間種というが、種子のないヒガンバナ

に間種というのはむずかしい。

(田中修著・雑草の話)

私はヒガンバナの研究家ではないので、こ

ういう疑問について、的確な回答などありま

せん。ただ、多くの証言を聞いたり、10ジェ

ネットくらいは掘ってみたりしていますので、

私の感想を述べてみましょう。

1 種子のこと。山岸さんは、その広がり

かたから、種子ができている…と思うそ

うです。私は彼女を激励中で、実験の結

果を待っているところです。なお、古谷

(航平)さんから、「種子ができることも

ある…という研究もあるんです」と、言

われたりしています。

2 ヒガンバナの団子状集団(ジェネット)

を観察していますと、稀にその近くに個

体数の少ない小集団を見かけます。地下

茎の連絡はありませんので、これが曲者。

私は思案中。キツネノカミソリの場合も

これが見られるのですが、こちらはその

小集団が小さく細く、種子の発芽したも

のと知られるのですが。

3 ヒガンバナの鱗茎の分割は大球がふつ

うですが、小球でも起こります。また1

株に球が串団子みたいに2つ、時に3つ

並んだりします。私は現在、桐生市にあ

る、国の重要文化財の、彦部家住宅で、

その屋敷の植生を調査中ですが、この

ジェネットのそばに、20〜30cmばかり離

れて、1株(1本)ずつ生えてるヒガン

バナを見つけました。掘ってみたのです

が、とくにどうということもなく、団子

状に3個つづくのをそこで見ましたが、

その基の部分を見失ってしまいました。

こういう1本がやがて集団となるのかど

うか。

4 ジェネットの中に小さいものが混ざる

こと。これも物怪なことの一つです。鱗茎

が同時に3分球中のももの見つけており

ますが、大きい球から小さい球を作るノ

ビルのようなやりかたは見えていません。

5 田中修氏のご指摘はもつともでしょう。

氏が言われるように、中国にあるという

2倍体とシヨウキズイセンの間の子かも

しれません。こんなこと究明してくれる

酔狂(といえは失礼か)な人がでてくれ

ることを待つよりなさそうです。

なお、余談ですが、私は将来、道州制になっ

たら、各道に、いまの一つの県くらいの自然保

護区を設けてはいかがかと、考えています。

川でアユ・ウナギはもちろん、ドジョウ・ホ

トケドジョウ・シマドジョウ・サワガニ・ホ

タルが全滅し、田植えのあとにカエルの鳴か

ない日本の多くの自然はもはや自然と呼べる

ほどのものではありません。自然もどき。大

型電気店などで、一日中TVを30台も40台も

チャカチャカ映しておくような狂騒で、自然を叩き潰してきた文明が、人類を深い危機に陥しこんでいるという現実をもっと反省したいと思います。遊びほうけて、それができなくなつて泣いている…という光景は、幼児的すぎると思つてゐるのです。

群馬の地質

屋根瓦にみる大ゆれゾーン

飯島 静男

3月11日は足利にいた。山の斜面で、ひとかかえほどの桜の木を伐り倒したら、地面が揺れ始めた。(馬鹿に大袈裟だね)と思う間もなく、山全体がどどどん、どどどん。麓の電線が電柱間で波うち、そばの家の屋根瓦がなだれ落ちた。谷の向こうでは土煙が上がつてゐる。ゴルフ場の盛り土でも崩れたらしい。

帰りがけ桐生、広沢の旧道を通つたら、あつちも、こつちも棟瓦の崩れた家だらけ、中には屋根瓦が全部落ちてゐる家もある。

人の話では粕川、大胡、北橘にかけて、棟瓦の落ちた家が目立った。振動の強いゾーンが足尾山地南縁から赤城山南麓にかけて、線状にのびてゐるらしい。その延長は旧子持村

北部にもみられる。

高崎の中尾団地周辺でも棟瓦崩壊をいくつか数えたが、広域にわたる調査はできていない。地質的な区界で震動が強くなるらしいがよくわからない。

Nさんは翌日車で見てまわり、藤岡の平井から保美にかけて、平井断層に沿つて、被害屋根が連なつてゐるのを確認した。

悪質な屋根修理屋には気をつけましょう。

残された自然の中で (153)

観音山鳥日誌②

谷畑 藤男

3月

6日は啓蟄、キャンプ場の小さな池にヤマアカガエルが産卵。浅い水底に「肉まん」大の卵塊が約十個沈んでゐる。陽だまりの斜面にはオオイヌノフグリやホトケノザの花、谷筋にはフキノトウが春を告げ、ウグイスの囀りもあちこちから聞こえるようになる。11日午後2時46分、三陸沖を震源とするM9.0の巨大地震が発生した。数分後には観音山も激しく揺れ、キャンプ場の管理棟もミシミシと音を上げ、窓辺の駐車場では車が前後に動き出

した。

中旬の給餌台は客足が絶えない。17日にはカワラヒワ14羽、カシラダカ6羽、マヒワ3羽、キジバト2羽、ヤマガラ2羽、ヒヨドリ1羽そしてミヤマホオジロ雄1羽を記録する。

ミヤマホオジロは3月下旬まで給餌台を時々訪れた。23日、キャンプ場の尾根で2羽のオオタカがキジバトを1羽追う。林縁を低く飛びキジバトは逃げ切つたが、雌雄2羽で獲物を追うオオタカの狩りを見たのは初めてだ。

下旬になると、ヒカンサクラの紅色やサンシユの黄色の花々が枝先を飾り、園内の彩が増してくる。

4月

4月を待つていたかのように園内は百花繚乱。道端にはタンポポ・タチツボスミレ・ヒメオドリコソウ。パンガロー前のヒヨウガミズキ・ユキヤナギが咲き出し、春の主役ソメイヨシノの満開は昨年より遅く8日だった。桜の遅れに付き合うようにツバメの飛来を確認したのは12日。4月中旬、ピンクの山は一瞬间の桜吹雪で黄緑の世界に変化する。春を惜しみつつも、日々枝先の新芽は成長し緑の山は膨張する。

キャンプ場の管理棟からヒノキ林内の急な

山道を5分も上がると、突然視界が開け目前に県立みやま養護学校がある。屋根の北西は緩やかな丘陵で耕地や牧場があり、その一角には観光スポット「展望花の丘」もある。地形や植生の違いは鳥類相にも表れる。丘陵地にはキャンプ場では見られないキジ・ヒバリ・ハシボソガラス・スズメなどが生息する。4月、養護学校付近で50羽ほどのニユウナイスズメの越冬群とカオジロガビチョウ2羽を見る。今後の動向を注目したい。

5月

緑に包まれた山に、木々の白い花が目立つ。上旬はウワミズザクラの花穂、中旬にはニセアカシアの花房とミズキの円盤状集合花。下旬になると白い十字架ヤマボウシ。エゴノキは枝先に多数の白花を掲げる。それぞれの樹木が存在感を示している。

緑の舞台が整うと、キビタキ・コサメビタキ・センダイムシクイなど、南方から夏鳥が次々に渡来する。9日オオルリ、12日クロツグミの囀りを園内で聞く。16日ハチクマ2羽が上空を旋回し、雄は時々波状飛行の頂点で停飛するパフォーマンズを見せる。停飛時には両翼を11時5分の角度に持ち上げ5回前後はばたき下降に移る。20日ホトトギスの初音。

27日曇天の荒久沢上流方向よりアカシヨウビンの声。アカシヨウビンは昨年(2010)6月19日にも園内ヒノキ林に飛来し美声を聞かせてくれた。この季節、森から次々と便りが届く。

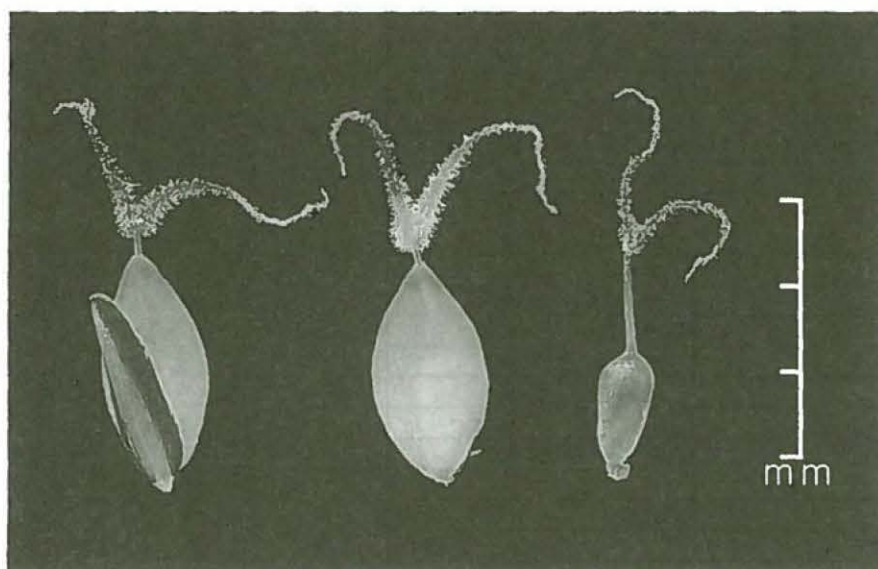
植物をミクロで見る (2)

ヌマアゼスゲとアゼスゲ

青木 雅夫

群馬県の低地帯にはアゼスゲとヌマアゼスゲが生育する。姿形が似ているので、なかなかヌマアゼスゲの存在が知られなかった。いろいろ調査を進めていく内に、このヌマアゼスゲは水辺の豊かな環境を象徴するいわばホトスポットを代表する植物であると考えられるようになった。小穂を顕微鏡やルーペで観察すると、果胞の口に特徴がある。アゼスゲのように徳利の口のように伸びていないのだ。雄しべの先端は2裂している。その精巧な作りにもいつも驚嘆させられる。

全国の分布は、他に岩手、宮城、茨城、千葉、埼玉、栃木が知られているが、その中でも非常に限られた場所にしか生育していない。



平成22年度会計報告

収入の部

自 平成22年4月1日
至 平成23年3月31日

項目	予算	決算	増減	摘要
前年繰越金	17,026,528	17,026,528	0	
会費収入	600,000	588,000	-12,000	
環境調査受託料	4,700,000	4,725,000	25,000	八ヶ場ダム建設所 受託事業
清掃登山受託料	830,000	830,000	0	群馬県自然環境課 受託事業
観察教室参加費	0	555,000	555,000	
観察会参加費	0	106,200	106,200	
寄付金	500,000	572,000	72,000	
利息	0	12,712	12,712	
雑収入	0	30,000	30,000	
合計	23,656,528	24,445,440	788,912	

支出の部

項目	予算	決算	増減	摘要
事務運営費	4,500,000	4,664,470	164,470	
自然観察会費用	170,000	235,337	65,337	
清掃登山費用	50,000	29,410	-20,590	
サクラソウ絶手当て	10,000	43,500	33,500	ゴマシジミ手当て 36,000円
環境フェスティバル	15,000	13,100	-1,900	
自然観察教室 補助	30,000	539,151	509,151	
会報・発行費	420,000	303,397	-116,603	
自然保護対策委員会	30,000	27,362	-2,638	
調査費	2,500,000	1,515,000	-985,000	
予備費	250,000	0	250,000	
合計	7,975,000	7,370,727	-604,273	

収入 24,445,440 - 支出 7,370,727 = 繰越金 17,074,713

平成23年5月11日
上記の通り相違ありません。
監事 茂木 孝允 監事 反町 實男

平成23年度予算案 (23年4月～24年3月)

平成23年5月21日
特定非営利活動法人 (NPO法人)
群馬県自然保護連盟

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
繰越金	17,074,713	事務運営費	4,510,000
事業収入	7,602,000	地代家賃費	770,000
会費収入	600,000	水道光熱費	130,000
観察会参加費	105,000	職員費	2,000,000
観察教室参加費	555,000	税金	80,000
八ヶ場登山受託料	830,000	諸経費	1,530,000
環境調査受託料	4,700,000	事業費	4,400,000
特定外来植物の駆除	300,000	サクラソウ・ゴマシジミ	50,000
寄付金	500,000	観察会	230,000
雑収入	0	清掃登山	50,000
利息	12,000	観察教室	550,000
		環境フェスティバル	20,000
		会報費・発行費	420,000
		自然保護対策委員会費	30,000
		調査費	2,500,000
		特定外来植物駆除	250,000
		記念講演会	50,000
		予備費	250,000
		次期繰越金	15,766,713
合計	24,676,713		24,676,713

平成23年度 総会報告

平成23年度定時総会は、5月21日群馬県生涯学習センター第2研修室で開催されました。

出席者122名(本人出席21名、委任状104名)。総会成立の要件「会員の5分の1」を満たしたため総会の成立を確認。次いで司会者(事務局長)より議長の選任を諮ったところ、岸好孝氏を満場一致で選出。議案の審議にあたる。議長より議事録署名人に事務局吉田龍司、大

理幸子両氏を指名。議案の審議に入る。

第1号議案「役員に関する件」で阿部孝夫氏の理事途中辞任に関する件について諮ったところ意見なく承認された。

第2号議案「平成22年度行事報告」、並びに第3号議案「平成22年度決算報告並びに監査報告」、両案は反対意見なく満場一致で承認された。尚茂木孝允、反町實男両氏から「会計は適正かつ正確である」旨会計監査報告が行われ異議なく承認された。

次いで第4号議案「23年度行事案」、第5号

議案「23年度予算案」について慎重審議の結果、両案とも執行部原案通り満場一致で承認された。議長は議案審議が終了したので退席した。次いでその他の項目により質問を受けた結果、情報発信が少ない旨指摘があった。事務局は開示できるものに関しては、ホームページの「掲示板」を設置して情報発信を充実させることにして閉会を宣言し散会した。

事務局日誌 (161)

3月8日 会報原稿編集長へ送付
 3月9日 ハッ場ダム工事事務所 検査打合せ
 3月22日 県庁請求書提出
 3月24日 赤城山自然保護推進協議会
 3月26日 3月理事会 9名出席
 3月28日 ハッ場ダム工事事務所 成果品検査
 3月29日 3月理事会議事録 郵送
 4月3日 ぐんま自然観察指導員会 総会
 4月5日 会報「群馬の自然」春号 印刷所へ
 4月6日 群馬県林業試験場 挨拶
 4月8日 東電(株) 原発事故関連で来所
 4月9日 赤城姫を愛する集まり 総会
 4月10日 角田山自然観察教室 参加者28名
 4月11日 赤城山環境ガイドボランティア講座 会議
 4月13日 赤城山自然保護活動 現地下見/会議
 4月14日 県自然環境課補佐来所「清掃登山委託契約」
 4月15日 会報「群馬の自然春号」郵送
 4月18日 「太田金山」自然観察会「下見」3名
 4月19日 県自然環境課「特定外来植物駆除」会議
 4月20日 赤城自然塾 定期総会
 4月23日 4月理事会 12名出席
 4月24日 「太田金山」自然観察会 参加者20名
 4月25日 赤城山自然保護推進協議会

ホームページ掲示板設置

ホームページに掲示板を設置いたしました。
 会員間の情報交換の場として利用していただければ幸いです。またHPだけでなく電話やメール・来所等で皆さんのご意見やご感想もお寄せください。よろしく願います。

4月27日 特定外来植物現地視察(境島村) 8名
 4月28日 同左(榛名沼の原・沼田薄根川) 7名
 4月29日 「鳴神山」清掃登山 参加者20名
 4月30日 赤城自然塾 環境教育プログラム報告会
 5月1日 赤城覚満淵「ササ狩り作戦」 参加者97名
 5月4日 赤城山サクラソウ巡視・笹刈
 5月11日 22年度会計監査
 5月12日 ハッ場ダム建設事務所
 5月14日 赤城山サクラソウ巡視・笹刈
 5月15日 「相馬山・黒岩」清掃登山 参加者39名
 5月21日 定時総会
 5月22日 叶山鉱業所「天狗岩視察」 11名
 5月23日 県庁/会議、報告書提出
 5月28日 赤城山サクラソウ巡視・笹刈
 5月29日 「荒山高原」清掃登山 参加者8名
 5月30日 赤城自然塾 運営会議
 6月1日 「23年度県環境賞」推薦書送付
 6月2日 「荒山高原」清掃登山県へ報告書提出
 6月3日 県自然環境課
 6月4日 前橋市立宮城中 林間学校赤城山指導
 6月5日 「赤城五輪尾根」自然観察会 参加者40名
 6月8日 県NPO推進課「22年度活動報告書」提出
 6月12日 赤城山環境ガイドボランティア養成講座Ⅱ
 6月16日 Naciss「全国」斉自然観察会「結果報告」
 6月18日 6月理事会 11名出席

編集からのお願い

次号特集は「妙義こども自然観察会」です。
 原稿締めきりは9月15日です。自然保護に関するご意見や観察記録等ありましたら事務所宛にお送りください。よろしく願います。
 冬号では「ぐんま百名山の自然Ⅸ 尾瀬の山

々」を予定しています。対象は景鶴山・皿伏山・至仏山・笠ヶ岳・奥怒沼山の五山です。

事務局だより

・理事、谷畑藤男氏が第65回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」野生生物保護功労者表彰式で、常陸宮殿下ご臨席のもと環境大臣賞が授与されました。永年に亘る野鳥研究と実践の賜物と敬意を表します。おめでとうございます。

・5月1日、赤城山覚満淵で「笹刈作戦」が行なわれました。当日97名の方がボランティアで参加され貴重な草本が甦りました。再度11月雪の降る前に、「笹刈」を行ないます。皆様の参加ご協力をお願いいたします。

・5月21日、県生涯学習センターに於いて定時総会を開催しました。議事は執行部原案通り承認されました。

詳細は会報をご覧ください。

・7月28～29日、県生涯学習センターで「サイエンスウィーク」が開催されます。連盟は『野生動物の頭骨を比べてみよう』と題してクマ、イノシシ、キツネ等、沢山の頭骨を出展し解説します。直に触れることも出来ますのでお子様連れでご来場ください。入場無料。

新会員紹介（敬称略）

秦野 栄治（高崎）	原田 光章（高崎）
森田 尚宏（高崎）	嶋村 章（前橋）
滝川 勝（高崎）	都丸 裕子（前橋）
坂本 侃（高崎）	斉藤 和久（高崎）
内田かおり（前橋）	牛木 義（渋川）
伊藤千代子（高崎）	紺野 剛（前橋）
佐藤 美江（前橋）	青木 桐江（前橋）
荒木 浅枝（前橋）	

寄付金

山下由起子様	金 8,000円
高野 幸枝様	金 1,000円
横山 雄次様	金 3,000円

寄贈図書

赤城姫を愛する集まり様・「会報第23号」
岸 好孝様・「谷川岳の自然」

匿名 様・「僕らはみんな生きている」
匿名 様・「赤城のクモ」林 俊夫著

会費納入のお願い

会計年度は4月1日～翌年3月31日です。会費未納の方には振替用紙を同封しました。ご納付お願い致します。行違いのせつは

お許し下さい。

赤城山スキー場周辺における

「ゴマシジミ関連調査」

連盟は昨年に続き「第Ⅱ回ゴマシジミ関連調査（片山副理事長）」を行います。調査はどなたでも出来る簡単な作業です。調査に協力いただける方は、事務局までご連絡ください。

・日時 8月14日（日）午前9時

・集合場所 赤城山ビクターセンター駐車場

・調査内容 ゴマシジミチョウに関連するワレモコウとシワクシケアリの分布確認調査

群馬の自然 161号

発行日 平成23年7月
発行人 NPO群馬県自然保護連盟
編集人 谷畑藤男
発行所 群馬県自然保護連盟事務所
〒370-0046
高崎市江木町610-10
電話 027-324-5706
振替 00320-6-13239
会費 2,000円（年間）